

## ヤニーナ先生との遠足



ラトヴィア・リーガ市在住

黒澤 歩



ロシアとの国境警備所を引率するヤニーナ先生



国境沿いの村ゴリシェヴァ

ヤニーナ・クルシーテ先生は、その柔和な顔つきからか、まるっこい印象の素朴な風貌だ。ラトヴィア大学文学部の教授で民俗学を専門としている。フィールドワークに重きをおき、学生や研究者を連れて、バルト3国だけでなくシベリアやカーニングラードに出かけ、生き残る民俗資料の収集と比較を実践している第一人者である。分け隔てなく優しく、どんな人にも、そしてどんなちっぽけなことにも研究の芽があることを教えてくれる良き教育者であり、研究論文がだれにも読まれない退屈なものではなく気づきがある読み物であっていいことを、多くの著作で実現している。わかりやすい言葉話し、そして常に現在を多角的に捉えるヤニーナ先生は、文化という枠を超えて社会と政治問題においても多大な発言力があり、テレビやラジオでも引っ張りだこだ。私も、ヤニーナ先生の魅力に惹き付けられて、ラトヴィア大学に通っている。

08年12月の半ば、ヤニーナ先生と比較民俗学のクラスの学生らと一緒に、ロシアとの国境にあるゴリシェヴァという小村を訪れた。教会から百メートルも離れないところにある国境が、村がロシアと分断されたことを示している。人口は2千人程度のその村は、帝政ロシアの時代からロシア人が多く

住んできた地域にあり、生粋のラトヴィア人は数えるほどしかない。そのことが、この村を特異な研究対象にしている。私たちの訪問の目的は国境の民俗の学会だというのに、国境警備の施設と地元の教会と墓地を見学しながら、学会はいつになっても始まらない。小さな文化会館に村長と地元合唱団のメンバー、そして地元の中高生ら10人ほどが集まって、地元の学校長による村の紹介があったものの、その後はひたすら合唱とダンスとなった。「研究論文を発表するよりも、数倍も効果のある学会の形があっていい」ヤニーナ先生はそう言った。

翌日訪れた近郊の小村で、結成50年以上という民謡グループの聞き取りをした。普段着の女性たちが最高年齢は85歳という女性二人を囲んで集り、ラトガレ方言で説明を加えながら歌いだした。窓の外の雪景色を見ながら、朗々と高らかに響く民謡は暖かい。「え…と、続きの歌詞はなんだったかしら」などとつぶやきながら、歌が1時間は悠々と続く。文化会館というその部屋で、手作りビールに手作りウォッカ、手作りピロシキに地元のリングで体も心も温まっていた。ラトヴィアの人は、メロディーも歌詞も人が集まったその場の空気ですり出すようである。気取らない和やかな雰囲気は、ひとえにヤニーナ先生のさりげない

手ほどきがあるからだ。食事の席では、だれよりも早くみんなのグラスにお水を注ぐ姿がヤニーナ先生の、細やかな配慮と懐の大きさを表している。

村で、小高い丘の上の教会を案内してくれた女性が、「この丘の土を運んだのはクマです」と言う。「クマって？」ヤニーナ先生がすかさず聞き返す。「ふつうの茶色い熊のことです」熊が人に調教されて土運びをしていたという。先生も「初耳！」と驚いたが、だれもが土を背負った熊の姿を想像したものだ。知らないことはまだまだいくらかでもころがっている。けれど、そこまで出かけていかないとわからないことがある。

12月、不正で実刑を受けることになった議員に代わり、ヤニーナ先生は国会議員になった。議会は地方行政改革の法案採決の真っ最中で、政府与党が可決を強行した。「賛成ボタンを押すことは、特定の国民には死の宣告だ。これっぽっちの思案もなく、ただボタンを押す多数決の行為はおそろしい」。初の議場から出てきたヤニーナ先生の言葉はずしりと重かった。人には、たとえ国会議員であろうと、本来は良識という「感情」があるはずだったのだ。